
神様の棲んだ家

山川海子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の棲んだ家

【Zコード】

Z4587B

【作者名】

山川海子

【あらすじ】

妊娠の予感を持つ女性（主人公）が沖縄の小さな島へ向けて出発します。そこでおこる出来事。

沖縄へ旅立つ女性は妊娠の予感を持つ。

9月11日、水曜日の出勤途中。

混雑極まる国道8号線の路上で、私は、元すとせのアルバムを聴いていた。

彼女の唄を聴くようになつてから、確実に私の朝のラッシュ時のライラ指数が、下降傾向にあることに気がつく。

唄の力。

沖縄の魅力。

前回、沖縄に行つたのは、もう2年も前なんだな。
ふと、鮮明に記憶が、胸に差し込んできた。

まず最初は胸にぐつと一撃。

そして、濃い砂糖水のように、不敵な重たさで、じわじわと、私を浸蝕しはじめた。

体が、けだるい甘さに包まれる。
めまいがしそうで、私は頭をふつて、運転に集中するように、気を取り直そうとする。

でも、あふれ出てくる、記憶の断片。

いや。

もはや、記憶からはみ出してしまっている。

もしくは記憶の中に、別の次元から何かが流入しはじめている。
目にしたこともないような風景までもが、渦を巻き始め、私は、囚われていった。

それでも、記憶をたどつてみるなり。

2年前の秋、満月の夜の首里城で催された「仲秋の宴」に、たまたまくわした。

泡盛を飲みながら、伝統的な琉球舞踊や、勇壮なエイサーを見た。

月が刻々と、軌道にのって運行していくスピードで、夜は進んでいく。

どの出し物も、絶対に端折られることなく、最初の頃は「うわ、このペースで、これだけの出し物をやつたら、何時までかかるんだ？」ときょときょとしてプログラムを見たものだが、すぐに夢中になつて、最後には、更けていく夜に取り残されて、宴の終わりの中で、さみしくてならなかつた。

宴の余韻をかみしめながら、夜道をとぼとぼ、宿まで帰つた途中に、真っ白に輝くスーパーがあつた。

小川洋子さんの「シユガータイム」の、主要な場面である「サンシャインマーケット」のイメージがだぶつたので、私は今でもその店を勝手に「サンシャインマーケット」と呼んでいる。

こうじうと明るぐ。でもどこかさみしい気持ちを、そつと包んで、足りなくもないし、はみだしもしない。

『サンシャインマーケット』で、あまこあまこ、メイドインアメリカのチョコレートを買つた。

チョコレートを食べながら眠つた夜に、底なしの悪夢にうなされて、その当時好きだった男の子に泣きながら電話をかけた。

南国の楽園は、摩訶不思議で、奇怪で、でも死ぬほど甘美で、私はとつこになつた。

もう一度、沖縄に行きたい。

でも、遠いよなあ。

会社が近づく。

最後の跨道橋は、大きな川を渡る。

朝日にきらめく、川面が目の前に開けた瞬間、旅だちは決まった。

会社についてすぐ、チケットをインターネットでとった。

もう笑いがとまらないほど、元気に、陽気になつた。

私は自由よ。

大声でどこかまわづ、誰かまわづ、そういうふうして歩きたいいような。

はちきれそうにわくわくしながら、出発を待つた。

出発の朝は、静かだつた。

かしこまるような静寂の中、私はそおつと、旅だつ。

滑走路を滑り出す飛行機。

一瞬の浮遊感。

あつとこつまひーチュアになる、下界の風景。

私には一つの予感があつた。

子を宿しているかもしけない。

だから旅の間中、私はおなかを包み込むよつて歩いていたんだと思う。

飛行機にのつて

トランസオーシヤン航空の機内サービス、オニオンスープは、当然レトルトだらうけど、なかなかおいしい。早朝の北陸は肌寒かつたし、冷房の効いた機内ですっかり体が冷え切つていた。オニオンスープがあたたかくお腹を満たしてくれて、私は落ち着いた。機内ではそのスープを飲みながら、読書をした。落ち着いて、まとまつた読書をするのは、ひどく久しぶりだ。私は、まだ見ぬ八重山諸島のことはそんなに氣にもかけず、とてもリラックスして本を読むことに没頭していた。沖縄に強く行きたいと願つてきたが、だからといって特別なことや過剰な愉悦を期待するわけでもなく、私は、のんびりと海でも見ながら本を読むつもりで、なかなか普段読めなかつた本をぞつぞつ旅の荷物に備えてきた。

そういうじてると、飛行機は、沖縄へもう近づいてきた。窓から見下ろすと、小さな島がいくつもいくつもつらなる。底のほうからきらきら発光しているような、特殊な青をした遠浅のサンゴの海が、島をふちどる。

うつくしい。眩めくような、うつくしだ。もう私は、我を忘れ、窓にはりついて、その恐ろしくうつくしい海を眺めた。海の色はこんなに鮮やかにくるおしくうつくしいものだつただろうか？私は息をのんだ。目を閉じてしまいたいような、まばたきひとつせずに見つめていたいような、相容れない気持ちが同居して私は落ち着きなく、本を閉じてしまった。作家・灰谷健次郎さんが「それは生きているうちに見てはいけない種類の美しさだ」と形容した沖縄の海。飛行機はもうゆるやかに下降を始めている。

着陸。軽い衝撃。「ああ、帰ってきた」無意識にそんな言葉が出ていた。「帰ってきた」。沖縄へ。

空港で、石垣島行きの便に乗り換える。時間があるので、空港内をぶらぶら。ちょうど、琉球民謡・民舞のステージをしていた。ちらりと見るだけのつもりだったが、はまってしまって、じっくりと見た。

NHK

朝の連続ドラマ、「ちゅらさん」で、えりいが踊っていたような、素朴でかわいらしい踊りだ。

お昼にとりあえず、沖縄再会記念として、ビールで乾杯。もちろん「オリオンビール」。普段は絶対にキリンの「一番絞り」びいきの私。沖縄にきた瞬間、オリオンビールを飲まなきやと思うのが我ながらおかしいが、沖縄にきた人はみんなそうみたい。と、この旅で出会った人々みんながどのビールメーカーも無視してオリオンを飲んでいるので分かった。「ごはんは「ソーキそば」だ。沖縄のそばは、ひらべつたくて、きしめんのような形状で、コシは全く無いのだけど、なんだかやみつきになるおいしさ。帰りに土産を選ぶ時間がなないと困る、と土産の下見をする。前回買い損ねて、ちょっと心にひつかかっていたもの。それは、珊瑚の指輪。つすももいろじゃなく、血の色をした真っ赤な、小さな一粒が、華奢なプラチナにちょこんと鎮座しているようなそういうデザインのものに前回、めぐりあつた。私はいまだかつて男の人に、指輪を贈られたことがない（父親除く）。花は、パリ旅行でついに念願を果たしたが（たまたまオプションツアーで一緒だった方と食事をしていると、花売りがやつてきて、彼は一輪の深紅の薔薇を冗談めかして贈ってくれた。）、指輪も、やっぱり、いつか大切な人に、高価なものでなくていいから

贈つてほしいところ、少女じみた願望から、今回もその珊瑚の指輪は買わないだろ？と予感する。

ビールをもう一杯。と思ったが、（きまつたわけではないけど）妊婦にアルコールはよくないのかもしれない、一応控えた。しかし直後、石垣島への便の搭乗口のすぐ隣の売店で、「青い海と空のビール」というオリオン以外の沖縄のビールを（地ビールというのです）発見し、ぜひ味をたしかめたり、ついつい飲んでしまった。ただし、私の好みの味ではなかった。まずいという意味ではないので、みなさんには、お気になさらずに、見かけたら、試してください。壇詰めの、海と空の色をした涼しげなパッケージのビールです。「フルーティな味わい」がすると書いてあったので、きっとそうなのでしょう。

石垣島へ到着。約45分のフライト。このとき機内では、最初の5分ほど本を読んでいたけど、朝が早かったこともあり、あとの時間は眠りこけた。

アテンダントさんに、着陸ですのドリンクライングを起こしてください」と言われ、目を覚ます。沖縄にきたというのに、ずっと飛行機、空港内だったので、やっと初めて南国の空の下に立つ。空気を深く吸い込んだ。突き刺すような強烈な紫外線。暑い！…頭がくらくら、視界はぐにゃぐにゃ。でも、心底、嬉しいという高揚感。八重山諸島。日本の南の果てまで、ついにやつてきた。ヨーロッパにいったときより、遠くへきた感じがした。洋上に、点々と連なる小島たちは、きっと、宇宙から見下ろすと、ほとんど見落とされてしまうに違いない。そんな場所に冒険のロマンを求めたわけでもなんでもなく、勝手に私は「懐かしい」という想いにとらわれて、やってきて

しまったのだ

吉本ばななちゃんの小説で、やつぱりあの嵐くんとのキスのお話の中に出てくる記述で、（数回前の雑記帳にそのキスの話はしましたが、一度読みたいという人のため、タイトルは『うたかた』という名作です）

こういうのもある。

「それでも嵐を好きになつてから私は、恋といつもの桜や花火のようだと思わなくなつた。

たとえるならそれは、海の底だ。

白い砂地の潮の流れにゆられて、すわつたまま私は澄んだ水に透ける遙かな空の青に見とれている。

そこでは何もかもが、悲しいくらい、等しい

私の恋もやはり、これまで桜や花火だつたんだと、これまでそう確信する。

ああ、ついに「海の底の」恋に出会つてしまつたのかもしれない。と、私は、「うたかた」の、きんぴか「ゴールド」の大輪の花が咲くのに、なぜか淋しい印象のする、その本の「装丁」を思い浮かべたものだつた。

彼は私を愛せないと言った。

誰も愛せないんだ、と淡々と語る彼を、私は死ぬほど思い切り抱きしめてしまった。

女の子が、こんな、男子を襲うような真似をしてはいけません、と、私はきちんと姿勢を元に戻されて、でも一晩彼の隣で安らかに眠つた。

涙は出ず、やさしい哀しみに満ちて、ある種の、決して荒々しくない絶望と、でも、その夜だけは、彼を独占しているという安息。

目を覚ましたとき、彼が隣にいる保障はなかつた。でも、ちゃんと彼はそこにいた。

「置いていけるわけがないでしょ、う」

彼は苦笑していた。

朝、さようならと手をふつた。

1週間も経たずに、私は旅だちを決心する。

石垣空港を出て、すぐ、島に渡る桟橋へ向かうバスに乗り込む。バスの中には運転手さんのはかに車掌？なのが、一見派手なかんじのおばちゃんがいて、

石垣に留まらないと言つと、とても残念そうに、しかしじドライな感じで「気が向いたら」と、親切に石垣島観光のパンフレットや時刻表や、もろもろ役に立ちそうなものをくれた。

そのさつぱりとした感じが、不思議と凜々しくて、気持ちよい女性だった。

バスは前払い、桟橋まで200円也。所要時間は20分ほど。このバスで一緒だった、いいむら君に、バスから降りて、船の切符の買い方などを親切に教えてもらつ。

彼の行き先は西表島。

私は竹富島。

船を待つ間の少しの間だけ話しただけだけど、彼の、すくすくまつすぐ育つた魂に、

さらに沖縄の空気が加味されて、とっても好青年がつくりあげられているなあ、と、感心。

ついに、竹富島へ向けて、船が立つ。

えーと竹富島は石垣島からたつたの15分。船の往復チケットは1週間有効で1100円也。

他にもつと、期限の長い回数券のつづりもあり、それは長期滞在者向け。

島で出会つた、もつと長居してゐる人がもつていた。

アクアマリンの絵の具を溶かした色を基調とした、しかし幾重にも色の深みを重ね、複雑な色味をあわせもつた宝石のような色の海を、船は疾走していく。

船がとおつた道の、海水がおおきく割れてうねつたあとが、どんどん新しく生まれては消えていくのを眺めながら石垣島にお別れを告げ、田指す竹富島のほうをみた。

ぼつぼつと震む島影。

船から身をのりだして、島がぐんぐん近づいていくのを田で、肌で、感じていた。

島へ到着！

民宿「小浜荘」さんのお迎えがきてくれていた。

実はこの「小浜荘」、朝、金沢の空港から電話をして強引に「泊めてください！」と拵み倒した宿。

迎えにきてくださつたのは若いお姉ちゃん。素朴な感じで、キュー

トなバンダナをあたまに巻いていて、

車の中では口数が少ないので、はにかみ屋さんなんだひとつ、最初は簡単な自己紹介をしたけど、無理に会話を続けることはやめ、濃い緑をぐんぐん抜けていく道をずっと見ていた。

車は集落にはいる。

タイムスリップだ。

確実に時間が、大きな単位で、巻き戻つた世界に足を踏み入れた。

そういう印象。

「小浜荘」について、「しばらく、待つてください」と、裏庭のテラスに通される。

冷たくてレモン色のシークワーサージュースがすぐに出でてくる。

「酸っぱかったら、シロップ入れてくださいね、とシロップも一

緒にでてくる。

テラスには、日によく焼けた、すごいハンサムな青年（私よりずっと若そう）が2人。

ビーチボーカーズのドラマみたいじゃん、なによ、この設定は。かつこいい！！

二人はとても感じがよく、私に無遠慮すぎない質問をしてくる。

二人は親友なのかと思ったら、ともに1人旅で、今この宿にたまたま一緒に泊まってるだけだという。

テラスにめんした部屋では、ぐうぐう昼寝をしている人も。沖縄の民宿は相部屋がほとんど。ふとんがひきっぱなしで、みんな泳いでは疲れ、帰ってきて昼寝し、また泳ぎに・・・という生活をぐうたら続けるそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4587b/>

神様の棲んだ家

2010年10月14日22時26分発行